

巻頭言

宇宙にある天体の物質を自分の手にとって調べてみたい、とは科学者ならずとも思うことであろう。それが科学技術の進歩とともに少しずつ実現しつつある。

昨年1月、NASAの探査機スターダストが約7年の歳月を経て、彗星（P81/Wild 2）の塵を採集し地球に持ち帰った。サンプルリターンとしては月岩石のアポロ計画に次ぐ、史上2度目の快挙である。その後約9ヶ月の間に、世界中の総数187名の科学者達が総力をあげて分析にあたり、彗星塵の正体がほぼ明らかになってきた。その科学者達の中には日本人も多く含まれており、彼らの成果の一端は本号に紹介されている。私もその一人として、この歴史的な試料の分析に携わることができた。正真正銘の彗星の塵を、初めて自らの眼で見えて調べる興奮と感動は筆舌に尽くしがたいものがある。

宇宙の天体を知る上で、その天体を構成する物質を、直接あらゆる分析機器を駆使して調べることの科学的意義は計り知れない。それはアポロ計画前後の、月に対する我々の認識・理解の違いの大きさを見ても明らかである。それゆえ、今後、太陽系の様々な天体をターゲットとしたサンプルリターン探査はどんどん増えて行くであろう。それとともに、回収試料を分析し、その中から科学的意義を読み取る役割を担う惑星物質科学は、確実にその重要性を増して行くと私は思っている。

さて、今、この小文の執筆中（9月末）に、日本鉱物学会と日本岩石鉱物鉱床学会が統合して新たに日本鉱物科学会が発足した。まさに日本の地球惑星物質科学を代表する大きな学会が誕生したことになる。鉱物は宇宙のあらゆる固体物質をつくる基本単位であり、その鉱物を基本として、広い視野で地球惑星科学の様々な問題に取り組んで行こう、という理念の下にこの学会が誕生した。惑星物質科学も、この新学会がこれから力を入れて行こうとしている重要な分野である。上述の観点から、惑星科学会にとっても、まさにタイムリーに心強い味方ができたと言えよう。今後、惑星科学・鉱物科学両分野の多くの若者達が、この魅力に満ちた科学の世界に興味を持ち、両学会が益々発展して行くことを心から願っている。

留岡和重（神戸大学）